

莊嚴の時の中に華やかに

神楽「五郎の王子」

浮き立つ

柿本光明

鎮守の森から、鉦や笛や太鼓の音が流れ、道の辻には幟が立ち、青い空がそのまま香り高い緑の風となつて吹きすぎて行くような美しい初秋の日である。

舞人のひるがえす袖は、豊かな柏木の緑が美しく揺れるように、莊嚴の時の中に華やかに浮き立ち、参詣の人々の心は弾みもするが、しかしその上にある大きな空は、穏やかな微笑みをたたえたまま、秋の賑わいを屈けるばかりである。

十月の——。それは村の鎮守の祭礼の当日である。年に一度の豊饒を祝うこの日こそ、母はわが子に新調の羽織、袴を着付け、父と一緒に出来る私の後ろ姿にこやかに微笑んだことだろう。

祭の盛儀を一目見んものと、老いた者、幼い者も、人目を恥じらう若い女も、そのようなことに頓着しなくなった老いた女も、早いうちから舞見の場所取りに鎮守の境内へつめかけていく。

——これは今から六十五年ほど前のことである——。夕映えの遠くの野、刈り取られた稲田も薄墨の風景になると、つるべおとしの秋の夕日は早く、境内の神楽殿には裸電球が中央と四方の柱に十数個とりつけられ、

境内の隅々に並ぶ屋台からは、アセチレン灯がつき、イカを伸ばして焼く香がただよい、夜のとばりが吹け行くにつれ、神楽殿は盛況となる。こども心に目で見、耳で聞く神楽舞の中でも夜中の十二時ごろから始まる「五郎の王子」という二時間ほどの神楽舞は大変印象にのこつていた。

先ず烏帽子に、狩衣を着けた舞人二人が、右手に鈴、左手に幣(ぬさ、または榊)を採つて「清めの舞」を舞い給う。

歌詞 たちばなの小門のみそぎを初めにて 今も清むるわが身なりけり
神楽に木綿とりしでてうちはらう 身にはけがれの露雲もなし

ついで、同じ斎衣を着けし四人の舞人が、神歌を歌い給えり。

「神舞」は一名で舞う「採物の舞」といわれ、「清めの舞」によつて清められた場に、神を迎えるための一人舞である。

歌詞 この御座へ参る心は山の端に 月待ち得たる心地こそすれ

幣立つるここも高天の原なれば 集まり給へ天地の神

右手に鈴、左手に扇子または幣を採つて舞う。

「五郎の王子」は「舞」は従て「語り」を主とするが、その「語り」は長文の祭文に拠っている。それでは、その筋をいうと次のようである。

盤古大王は后との間に四人の王子をもっている。太郎王子は木の神、二郎王子は火神、三郎王子は金神、四郎王子は水神である。

大王は死期を予知して、四人の王子にそれぞれ青、赤、白、黒の幡（ばん）を、すなわち九〇日ずつ）を与えるが、后から、胎内にいるもう一人の子（五郎の王子）にも、といわれて驚くが……。しかしもう与える日数がないままに、土神の称号と黄幡と宝剣を与えることにして神去る。

大王出歌 天降る天の叢雲押し分けて 降りし神ハ 那岐那美の神

抑御前に罷り出でたる某は如何なる者とか思ふらん。ばんこ大王とは吾事にて候。吾父國分大王様は二百七十才の齢を保ち九月のとう菊の

落葉と諸共に菊の涅槃に入り給ふ。某も父の跡を継がん為暦を取り寄せて易のうら本繰り見れば、当年二百五十才の壽命かと覚へて候。今ハ九月の事なれば、山の木の葉も茅の葉も大王の姿によく似たり。頭は冬の景色なり額に四海の波も打ち、腰に梓の弓を張り耳に蟬鳴く声がする。某に四人王子と四人の姫、男女八人の子を持て候。これよりも王子四人を呼び出し暇乞ひに讓状を取らせばやと存候。如何に太郎久々延遲命此所に現はれ給へや喃

太郎 父王子様、某を此所に呼び出し給ふは如何なる御事にて候かや

大王 ああ汝を此處に呼出したるハ余の儀にあらず。吾父國分大王様二百七十才の齢を保ち九月なる菊の落葉と諸共に花の涅槃に入り給ふ。

某も父の代を継がん為ざつしよ暦を取り寄せて、易のうら本繰り見れば、当年二百五十才の壽命かと覚へて候。最早九月の事なれば花の涅槃に入度候程に御身を呼出し暇乞をバ申するぞや

太郎 コレハ、父王子様、今更いとまの御誕とは夢か現か幻か、夢なら夢で醒めもせう。現なら現で消へもせう。幻なればさながら夜こそ寝られまい

愛する君も有りもせう。是非に叶はぬ事なれば、山海野川の畜類鳥類呼び寄せて、貴方の合性合年の者がまします事なれば、年の御祭替へをなされても、これでも叶はぬ事なれば、これより天に立昇り、星の御祭替へをなさるれば、三歳と云ふて三年の御壽命が延ぶると申する也。三年の御壽命永へて王子四人に姫四人男女八人、妃の宮様諸共に世を過ごさせ給へや喃

大王 如何に太郎王子汝の申する事も一々尤には候へ共、生ずれば死するハ古より夕生れて今朝死するもこれも浮世の有様よ。時を嫌はず無情の風に誘はれば、行かねばならん冥土の道、名残惜しふは候へ共、御身に讓り物をバ取らせ置くべし

先づ汝ハ生れ出るより青き木星に候へば青帝青龍王と頭じ東の帝王となをり、春三月九十日を領治して山八萬地八萬八千里の境に、青き御幣を立て、地より上をバ甲の里地より下をバ乙の郡、甲乙木星の

産子末世末代守護なし給へ。父の讓として青き御旗を一流遣す程に得て取り給へ

次に次郎王子ハ赤帝赤龍王と顕じ南の帝王となをり夏三月九十日を司どり、山八萬地八萬八方千里の境には赤き御幣を立て、地より上をバ丙の里地より下をバ丁の郡、丙丁火星の産子末世末代守護なし給へ。

父の讓として赤き御旗を一流つかはす程に得て取らせ給へ

次に三郎王子ハ白帝白龍王と顕じ西の帝王となをり秋三月九十日を司どり、山八萬地八地萬八方千里の境には白き御幣を立て、地より上をバ庚の里地より下をバ辛の郡、庚辛金星の産子末世末代守護なし給へ。

父の讓として白き御旗を一流遣す程に得て取らせ給へ

次に四郎王子ハ黒帝黒龍王と顕じ北の帝王となをり冬三月九十日を司どり、山八萬地八萬八方千里の境には黒き御幣を立て、地より上をバ壬の里地より下をバ癸の郡、壬癸水星の産子末世末代守護なし給へ

父の讓として黒き御旗を一流遣す程に得て取らせ給へや喃

太郎 コレハ、父上様の讓物悉く拝受仕りて候。これにて名残の歌を一首作らばやと存候

太郎歌 得て取りて喜れしからざるこの御旗 見る度毎にぬる、袖かな
大王歌 ぬる、とも汝は袖が有ればこそ 只朽ち果てる身こそつらけれ
大王 如何に後の宮この所に現はれ給へや喃

后 大王様自らを此所に呼び出し給ふは如何なる御事にて候か
大王 さん候。御身を此所に呼び出したるハ余の儀にあらず。吾父國分大王様二百七十才の齡を保ち九月なる菊の落葉と諸共に花の涅槃に入り

給ふ。某も父の代を継がん為ざつしよ曆を取寄せて易のうら本繰り見れバ当年二百五十才の壽命かと覺へて候

今は九月の事なれば花の涅槃に入り度候程に御身に暇乞をバ申するぞや

后 コレハ、大王様、今更暇の御誕とハ夢か現か幻か。夢なら夢でさめもせう。現なら現で消へもせう。さながら夜こそ寝られまじ。愛する君も有りもせう。是非に叶はぬ事なれば畜類鳥類呼び寄せて貴方の合性合年の者が坐しますなれば、其れに御祭り替へをなさるれば三年の御壽命延ぶると申する也

三年の御壽命永へて王子四人姫四人男女八人と吾共に世を過ごさせ給うへや喃

大王 ああ後の申する事も一々尤の事に候へ共、生るれば死するは古より今朝生れて晩に死するも之も浮世の有様よ。時を嫌はず日も嫌はず無情の風が吹いたなら行かねバ、無らぬ冥土の旅、名残借しふは候へ共、只一筋に思ひ切り給へや喃

后 されバ大王様男子四人に姫四人は如何遊ばし給ふぞや

大王 さん候。男子四人こそは先づ太郎王子は東の帝王と定め、春三月を司らせ、甲乙木星の産子を末世末代守護させて候。次に次郎王子は南の帝王と定め、夏三月を司らせ、丙丁火星の産子を末世末代守護させて候。次に三郎王子は西の帝王と定め、秋三月を司らせ、庚辛金星の産子を末世末代守護させて候。次に四郎王子は北の帝王と定め、冬三月を司らせ、壬癸水星の産子を末世末代守護させて候

次に姫四人は四方星と申して天に上げ星に御祀り置きて候。各々男女共四方四天と所も分け置きて候ぞや

后 次に御尋申す。吾胎内の七ヶ月半のみどり子が無事に誕生致し父の譲りと尋ねたら何を譲に取らせ給ふぞや

大王 あら何と申せしや。吾はこれ程年老いて額には四海の波も打ち越しに、梓の弓を張り、耳に蟬鳴く声もする浪々たる身の上に、汝の胎内のみどり子とは思も寄らぬ事なるが、たばかり事にはあらざるや

后 あら何と仰せられ候か。たばかり事と思召され候へば貴方の腰の差添を借し給へ。腹かき切りて緑兒を御目にかけて申すぞや

大王 ア、コレハ、汝が左程に申するなればたばかり事にも有るまじや。男子と思はれ候か。又女子と思はれ候かや

后 さん候。昔より男子ハ左、女子ハ右腹との事。王子四人は左腹に宿り、姫四人は右腹に宿り、誕生致し候へ共、此度は右かと思へば左に替り、又左かと思へば右に替り、男子とも女子とも計り難く候

大王 其子若し無事に誕生致し、男子に生れ来たる其時ハ中央に立つて中下一萬八千里を司らせ、山八萬地八萬八千里の境には黄なる御幣を立て、地より上をバ戊の里地より下をバ己の郡、戊己土星の産子末世末代守護させ給へ。父の譲として唐土の巻物日本の系圖神通の弓に縞黄金の鎧、刃は大刀奇明れん大馬劔と申する也。又この劔と申するハ古天竺に於て九萬鍛冶とて鍛冶屋あり。中に名鍛冶白屋若者と云ふ鍛冶が唐炭千俵取り寄せて、唐金七駄もかつぎよせ、三年三月も鍛へたる劔にて候。今この劔をバ八月十五夜朧月夜に当て見れば劔とハ見

へず、駒の頭にさも似たり。故に大馬劔と申する也。此劔をバ一寸抜けば一千人、二寸抜けば二千人、三寸抜く時は浴ねく敵の首にてもさりと落つる劔なり。未だ均等なる五行の文字の入りたる黄なる御旗を一ながれ流、これを譲りとらせ置く

又若し女子に生れたる其時は、苔の草子に玉手箱これを譲り取らせ置く程に、良の方に岩の室にて納め置き、四方四面に注しめ連を張り合番なされや後の宮殿

后 コレハ、男女八人緑兒に至る迄譲り御状を取らせ給ひしが、吾身をバ如何遊ばし給ふぞや

大王 あ、汝にも取らすべし。大王戀しく思ふなら見ても慰め此鏡、大王声が聞きたくバ打つて慰さめこの鼓、唐の鏡に唐鼓、これを譲り取らせ置くべし

后 コレハ、御忝じけなき事にて候。されば名残の歌を一首連らねばやと存候

后歌 得て取りてうれしからざるこの鏡 見る度毎に濡る、袖かな
大王歌 ぬる、とも汝は袖があれバこそ 只々朽ち果てる身こそつらけれ

某は四人王子に四人の姫男女八人後の宮緑兒に至る迄譲り御状を取らせ候。これよりも朝日の里日の叢雲に入らばやと存候

太郎出歌 春立ちと云ふばかりにて三吉野の山は枯れて今朝は見ゆらん
次郎出歌 夏山や森の梢が高けれバ空には蟬の唄声ぞする

太郎 抑御前に罷り出でたる某ハ如何なる者とか思ふらん。那岐那美二

柱の神の譲りを受け、第一番に生れ出でたる太郎久々延運命くくらのみこととは吾事にて候。さある間某はこれより青帝青龍王と顕じ、東の帝王となおり、春三月九十日を司り、山八萬地八萬八方千里の境には青き御幣を立て、地より上をバ、甲の里地より下をバ、乙の郡、甲乙木星の産子を末世末代守護致さバヤと存候

次郎 抑御前に罷り出でたる某ハ、如何なる者とか思ふらん。那岐那美二柱の神の譲りを受け、吾は第二番に生れ出でたる次郎迦具土命かくろのみこととは某の事にて候。さある間某はこれより赤帝赤龍王と顕じ、南の帝王となおり、夏三月九十日を司り、山八萬地八萬八方千里の境にハ、赤き御幣を立て、地より上をバ、丙の里地より下をバ、丁の郡、丙丁火星の産子末世末代守護致さバヤと存候

太郎歌 神はや常盤の色の始には 繁る木立は久々延運の神

次郎歌 なめして姿は見へぬ石と金 打ち出するハ、迦具土神

三郎出歌 秋来ぬと目にはさやかに見へねども 風の音にぞ現はれぞする

四郎出歌 冬来り誰かは告げし薄氷 溶けたと告げし山廻りして

三郎 抑御前に罷り出でたる某ハ、如何なる者とか思ふらん。那岐那美二柱神の譲りを受け、吾は第三番に生れ出でたる三郎金山彦命とは吾事にて候。さある間某はこれより白帝白龍王と顕じ、西の帝王とななり、秋三月九十日を司り、山八萬地八萬八方千里の境にハ、白き御幣を立て、地より上をバ、庚の里地より下をバ、辛の郡、庚辛金星の産子末世末代守護致さバヤと存候

四郎 抑御前に罷り出でたる某ハ、如何なる者とか思ふらん。那岐那美二柱神の譲りを受け、吾は第四番に生れ出でたる四郎水波能売命みずはめのみこととは吾事にて候。さある間某ハ、これより男帝黒龍王と顕じ、北の帝王とななり、冬三月九十日を司り、山八萬地八萬八方千里の境にハ、黒き御幣を立て、地より上をバ、壬の里地より下をバ、癸の郡、壬癸水星の産子末世末代守護致さバヤと存候

三郎歌 現はる、皆も頼もし影高き 金山彦ハ、強き御心

四郎歌 雨となり川と流れて草も木も 潤なせるハ、水波能売神

太郎 あら不思議やな。今度天より荒の悪王が一人降り下り、吾等の所もて争を為すとの事承つて候程に、これよりも弟三柱の神を此所に呼び出し一々直談仕らバヤと存候

歌 千早振る此所も高原なれば 集り給へ弟三柱神

三柱同音 兄先王子様、吾々を此の所に呼び出し給ふハ、如何なる御事にて候かや

太郎 さん候。第三柱神を此處に呼び出したるハ、余の儀にあらず。今度天より荒の悪王が一人下り、吾等の所もて争を為すとの事承つて候が、悪王方に味方為され候か、又吾方に味方為され候ものか、詳しく様子を語り給へや喃

三柱同音 あら不思議やな。今度天より荒の悪王が一人降り下り、吾等の所もて争を為すとの御事にて候かや

太郎 さん候。仲々の事

三柱 争を為すなれば、沖では櫓の立たぬ程、陸では蹄の通らぬ程、兵

具鎧を身に纏ひ、弓にせきづるよつて掛けかけすかやさずおつ取つて
兄久々延運命のなさんずる事は只今の御事にて候

太郎 コレハく、皆々頼母しき御返事かな。然レバかはさぬが為、

一しゆ兵揃ひをなし給へや喃

三柱 畏つて候

四人兵揃ひ さあて東方太郎の王子ハ青帝青龍王にてまませバ、ま
ませバ、青い龍に青い鞍置き、鎧に腹巻兜の緒をしめ、御手蔵錢旗七
十五流差し上げて、青龍川の東のはばたに六萬騎の武者を揃へて一陣
とつて控へたり

扱も南方次郎の王子ハ赤帝赤龍王にてまませバ、まませバ、赤い龍
に赤い鞍置き、鎧に腹巻兜の緒しめ、御手蔵錢旗七十五流差し上げて、
赤龍川の南のはばたに六萬騎の武者を揃へて一陣とつて控へたり

扱も西方三郎の王子ハ白帝白龍王にてまませバ、まませバ、白い龍
に白い鞍置き、鎧に腹巻兜の緒しめ、御手蔵錢旗七十五流差し上げて
白龍川の西のはばたに六萬騎の武者を揃へて、一陣とつて控へたり

扱も、北方四郎の王子ハ黒帝黒龍王にてまませバ、まませバ、黒い
龍に黒い鞍置き、鎧に腹巻兜の緒しめ、御手蔵錢旗七十五流差し上げ
て、黒龍川の北のはばたに六萬騎の武者を揃へて一陣とつて控へたり

太郎 コレハく、合せて二十四萬騎と相成る程にこれよりもせりばの
城へと押寄せて、各々つかさどる城郭を相守らバやと存候

三柱 襲つて候

太郎 三夜の明月辰のあしたに会ふづるにて候

三柱 一だんの御事にて候

やがて出生した五郎の王子は、父の名を知りたく、母の勧めによつて
兄たちを訪れるが、誰も教えてくれない。そののみか「おまえは鬼の子」
と罵られる。これを見ていた母から父の名を告げられた五郎は、冷たい
兄たちと戦うことを決意し、武術を修業して剣をまじえるが、骨肉の戦
いたるや…これほど、醜いことはない。つまり、家督相続の闘争であ
り、これを見た母は猿田彦に相談する。この「猿田彦」は猿田彦の面を
つけ、剣を持って舞う悪魔払いの一人舞である。

古い陰陽五行説に従えば、東西南北、一年三六〇日、春夏秋冬を、木
火金水に分けているが、兄四王子に父から与えられた春夏秋冬の各九〇
日から一八日ずつを五郎に分け与えて彼の所有「土用」とし、めでたく
納まるのである。五郎の「土」は元来その性の盛んなときには人間に災
多しとして、土の神すなわち「土公神」を祀るのであるが、その土公神
は、春は龍、夏は門、秋は井、冬は庭に在るとして、いずれもその場所
を祀ることが必要であるとする。昔、農民大衆に關係の深かった土用が、
なぜかように四季にそれぞれ分けられているのか、これは一般農民には
理解しがたいところである。

神楽の五郎の王子は、この点をわかりやすく説明するために、「古事
記」の神々の成立に中国の陰陽五行を混成して舞劇化したもので、およ
そ四〇場面から成つて演舞の時間は二時間ほどの長いものである。

五郎出歌 天下る天の叢雲袖ふりて 下りし神は埴安はにやすの神

五郎出歌 立ち出でし峯の岩をバ雲と見て 空行月はおぼろ月なり

五郎出歌 旅の空山路の奥に行き暮れて 結ぶ庵に露はなりけり

五郎出歌 草木迄埴安彦の神代より恵を受けて住める吾國に

五郎 抑御前に罷り出でたる某は如何なる者とか思ふらん。那岐那美二

柱の神の譲を受け第五番目に生れ出でたる五郎埴安彦命とハ吾事にて

候。さある間某ハ、年いとけなき時天上高天原に學問に上り山野の有

様を習ひ受け今成人致し候處、何所ともなく燕つばひらがひ一番飛び來たり互に巢

を組み十二の雛を生み揃へ。あの鳥を父と囀なげづる鳥もあり、母と囀なげづ

る鳥もある。残りし鳥は舎兄舎弟と囀なげづる也。あれを見これ聞くに

鳥類でさへ父母を尋ぬる事のうらやましさに吾七才になれども未だ父

母といふ事を知らず。これより下界に天降り父母の行くへを尋ね行か

バヤと存候

歌 尋ね行く麓の道ハ數多なり 空行く月はおぼろ月なり

五郎 それより直に思ひ立ち十日百日行き越へて來たる處は中津國、母

後の御館も程近く見へて候。昔ハ今に變はり來て門はあれども扉なし

築地ハあれど大家なし。むくろは壁に争ふて鹿の伏したる跡はあれど

も何時人通ふた風情かな、あら殘間しき風情かな。吾年に一度歸り來

て庭草踏んだる事なればか程亂れもすまいもの、吾三才の時植置さし

櫻も早枝折り頃に成りて候。之にて一首連ねバヤと存候

歌 古の花がもの言ふ代なりせばうちの様子を語れこの花

此の花に古を語れと云ふけれども、此花物云ふ事はなし先づく繁みの

草を押し分けて案内致さん

如何に大臣、母後の宮殿に案内致せよ

大臣 畏つて候、案内申す宮ノ内仔細語らん門のこなたに

后 誰ぞや彼程用心厳しき門外に荒立つ声を張り上げて案内仔細とのた

まふハ、何所何人にて渡らせ給ふぞや

五郎 さん候。某ハ五郎埴安彦命にて候

后 五郎埴安彦命は何として此所に參られ候かや

五郎 參るも余の儀にあらず。吾年若き時ハ父の所望ほしからずして天

上高天原に參り、今成人致し候處太刀の置き處兵具鎧の納め所駒の休

め所とても無く、吾にも父の所望これあらん。何卒御教へ給へや喃

后 如何に五郎、汝には父とは無く母とて自ら一人なるぞや

五郎 あら不審なる事を仰せられ候哉。天なくして雨降らず地なくして

草木そだたぬ。父なくして種をりず母なくして吾生れ來たらんや。大

野が原の叢くさむらも夜降る露を父として朝の露を母として腸々つわつて穗に

生ずると云ひけれ共、疑ひの母はあれ共父はなし早々誠の事を教へ給

へや喃

后 いや、汝ハ天のかざ子ならんや

五郎 なほばたとへが御座候。天のかざ子と申するハこれより辰巳に當

たり女護ヶ島あり。この島にこそ日本より吹き來る風を妻としてまう

くるも女子生る、も女子男子なくして女子ばかり、某男子に生れ來る

風情かな。早々誠の事を教へ給へや喃

后 如何に五郎、それ程に父の所望ほしく候へバこれよりも東の方に當

り太郎王子がをします。又南に次郎王子西に三郎王子北に四郎王子がをします。それに參り所望乞ひ給へや喃

五郎 コレハ、父の手なれし駒に木綿鞍をきせ、霞の鞭を取り揃へ

東の中下一萬八千里を只一時に馳せ行かばやと存候

まづ千里をくくと走り來て向ふはるかに見渡せば、大郎王子の御館と打見へて八棟造りの御殿あり

先づ東をきつと眺むれば、春の景色と打見へて櫻や梅や咲き亂れ、いつも春よと面白や。一首の歌にと書くばかり、鶯はく未だ巢の内に居るやらも、春は來たれど歌聲ぞせん

まづ南をきつと眺むれば、夏の景色と打見へて蟬の諸聲訪れて、いつも夏よと面白や。一首の歌にと書くばかり、夏蟬なく木葉の中にとかくれ居り、小なる蟲で現はれぞする

先づ西をきつと眺むれば、秋の景色と打見へて鹿の諸聲訪れて、いつも秋よと面白や。一首の歌にと書くばかり、秋來ぬとくと、目に爽やかに見へねども、風の音にぞ現はれぞする

先づ北きつと眺むれば、冬の景色と打見へて、せいざん子こうして谷のたこうつあぬつらこぎ寒こう鳥、鴨や鴉や磯千鳥、羽をバ波にたとまれて足をバ氷に閉ぢられて立たうや立たずの景色かな。いつも冬よと面白や。一首の歌にと書くばかり、君の召す霞の衣がほころびて、雪の肌にぞ現はれぞする

扱門外に立ちよりて見渡せば、一の門は黒金二の門は赤金三の門は白金、

四の門は黄金なり。片枝ハ黄金片枝ハ白金、實ハようりやくの玉の如

くなり。四十二間の唐御殿まに太郎王子と見へて黄金の脇息に打ちもたれ、さも悠々たる風情かな。御殿の様子を眺むれば、武士等が大勢より集りてひしめきかむろいついてあり。かつての方を見てあれハ十七八なる女郎等がむくろいついて羽子ついて、小琴を奏して見せ物語りこれも現夜の面白や。馬屋の方を見渡せば、馬をき鞍に百騎二百騎立ち列べ物に小具足取り揃へ、今でも何事あるなれば、御用に立たん景色かや。

これ程用心厳しき門外に立ち寄りて長々物云ふ事なし。まづく、案内を致さん、如何に大臣(大臣)「御前に候」

太郎王子に案内致せよ

大臣 畏つて候。案内申す宮の内仔細申さん門のこなたに

太郎 誰ぞや、これ程用心厳しき門外にあり立つ聲を張り上げて案内仔細とは何所何人にて渡らせ給ふぞや

五郎 さん候。某ハ末子に生れ出でたる五郎埴安彦命にて候

太郎 あら不思議よな。吾弟に当り五郎埴安彦命とは今日迄夢々存ぜぬ王子なり。又何として此所に參られ候かや

五郎 さん候。參るも余の儀にあらず。吾年若き時天上高天原にまひ昇り学問致し今成人致し候處、太刀の置き所兵具鎧の納め處、駒の休め所とてもなく四方四天となされし内を吾にも父の所望として、四つの朝廷を五つに配分なせとの乞ひ願ひに參りて候

太郎 仲々の事、四つの朝廷を五つに配分なす事ハ相叶ひ申さん。早々立ち去り給へ

五郎 配分なさらんに於てハ立ち去る事ハ相成り申さん。早々配分をな

し給へ

太郎 よく、聞き給へ。吾々年幼少なる時、父に離れ母後の宮殿ハ

年若ふして夫に離れ給ひ、男子四人姫四人男女八人こそは承はり候へ共男女九人と云ふ事は今日迄夢々存ぜず。早々玄關先を立ち去り給へ

五郎 如何に太郎王子よく、聞き給へ。夢々存ぜぬと仰せられ候ハ

尤もの事也。某ハ母の胎内七月半のみどり兒にて父の山路の御供仕り

候へバこれ一腹一所の兄弟には間違はなし。早々配分なし給へや喃

太郎 仲々の事、配分なす事ハ相叶ひ申さん。某ハ父王子様の仰せにハ

青帝青龍王と現じ、東の帝王となをり春三月を司り、甲乙木星の産子を末世代守護せん事ハ某の業なり。汝幾萬日所望願ふとも相叶ひ申さん。早々立ちのき給へ

五郎 兄先王子様ハ各々司るかど有レ之候へ共、某ハ末子に生れ出でた

るに依て未だ司るかど無レ之、早々配分なし給へ

太郎 されバ色よき返事をつかはさん。是より南に當り次郎火具槌命が

をはします。それに參り所望乞ひ給へや喃

五郎 コレハ、兄の意にまかせこれより南方次郎王子の館に參り大

音あげて所望乞はばやと存候

(一案内申す宮ノ内仔細申さん門のこなたに)

次郎 誰ぞや、これ程用心厳しき門外にありたる声を張り上げて案内仔

細とは、如何なる王子にて渡らせ給ふぞや

五郎 さん候某ハ末子に生れ出でたる五郎埴安彦命にて候

次郎 あら不思議やな、吾弟に當る五郎埴安彦命とは今日迄夢々存ぜぬ

王子なり。又何として參られ候かや

五郎 參るは余の儀にあらず。某幼き時天上高天原に舞昇り山野の有様

を習ひ受け今、成人致し候處太刀の置き處兵具鎧の納め處駒の休め所

とてもなく、四方四天となされし内を吾にも父の所望として、五つに

配分なせと乞ひ願ひに參りて候

次郎 仲々の事、この四つの御門を五つに配分なす事ハ決して相叶ひ申

さず。早々立ちのき給へ

五郎 配分なさらんに於てハ立去る事ハ相叶ひ申さず。早々配分なし給へ

次郎 如何五郎よく、聞き給へ。吾々ハ年幼少の時父にはなれ母後の宮は年若くして夫にはなれ給ひしは、男子四人姫四人男女八人とこそは承りて候へ共、男女九人と云ふ事ハ今日迄夢々存ぜず。早々立ち

り給へや喃

五郎 夢々存せんと申されしハ尤もの事也、某ハ母の胎内七月半にて父の山路の御供仕り候へバ一腹一所の兄弟にハ間違はなし。早々配分

なし給へ

次郎 よく、聞き給へ。二柱の神の仰せにハ某は赤帝赤龍王と現じて

南の帝王となをり夏三月を司り、丙丁火性の産子末世代守護せん事ハ某の業なり。汝幾萬日所望願ふ共相叶ひ申さず。早々立ちのき給へ

五郎 兄先王子等ハ各々司るかど有レ之候へ共、某ハ末子に生れ出でた

る者なれば未だ司るかど無レ之早々配分なし給へ

次郎 されバ色よき返事を使はさん。今日ハ當處神社の御祭禮に付きも

の云ふ事ハ萬事容赦せよとの事なれば、是より西方三郎王子に參り大

音あげて所望乞ひ給へや喃

五郎 コレハく、兄の意にまかせ是より西方三郎王子に参り大音あげて所望乞はばやと存候へ

(次に三郎と五郎の掛合は前方ハ兄王子と同じ故省略)

三郎 某ハ二柱の神の仰せには、白帝白龍王と現じ西の帝王となをり秋三月を掌どり庚辛金性の産子末世末代守護せん事ハ某の業なり。汝如何程願ふ共配分なす事相叶はず。早々玄関先を立ちのき給へ

五郎 兄先王子等ハ夫々掌どるかど有レ之候へ共、某ハ末子に生れ出でたる者なれば未だ掌とる處無レ之、早々配分なし給へや喃

三郎 されバ色よき返事をつかはさん。是より北に當り北方四郎王子がおはします程に、それに参りて所望乞ひ給へや喃

五郎 コレハく、兄の意にまかせ北方四郎王子に参り所望乞はばやと存候

(案内申す宮ノ内仔細さん四郎館に)

四郎 誰ぞや、これ程用心厳しき門外に荒々しき聲を張り上げて案内仔細とは何所何人に候かや

五郎 さん候。某末子に生れ出たる五郎埴安彦命にて候

四郎 あら不思議やな、吾弟に當る五郎埴安彦命とは今日迄夢々存ぜん王子なり。又何として此處に参られ候や

五郎 参るも余の儀にあらず。吾年幼き時天上高天原にまひ昇り山野の有様を習ひ受け今、成人致し候處、太刀の置き所兵具鎧の納め所駒の休め所とてもなく、四方四天となされし内を吾にも父の所望として五

つに配分なせとの乞願ひに参りて候

四郎 よくく、聞き給へ。吾々年幼なる時バ父に離れ母後の宮殿ハ年若くして夫にはなれ給ひしは、男子四人姫四人男女八人とこそ承りて候へ。共男女九人と云ふ事ハ今日迄夢々存ぜず。早々立去り給へ

五郎 夢々存せんとハ尤もの事也。吾バ母の胎内七月半にて父の山路の御供仕り候へバ、これ一腹一所の弟には間違ひはなし。早々配分なし給へ

四郎 よくく、聞き給へ。二柱の神の仰せにハ某は黒帝黒龍王と現じ北の帝王となをり冬三月を掌どり、壬癸水性の産子末世末代守護せん事ハ某の業なり。汝如何程乞ひ願う共相叶ひ申さず。早々立ちのき給へ

五郎 兄先王子等ハ各々掌どる門有レ之候へ共、某は末子に生れ出で候へバ未だ掌どる門無レ之、早々配分なし給へ

四郎 されバ兄三人に参られ候か、又吾一人に参られ候かや

五郎 さん候。太郎に乞へば次郎に乞へ、次郎に乞へバ三郎に乞へ、三郎に乞へバ四郎に乞へとの返事にて候。最早行く先も脚座なく早々配分なし給へ

四郎 兄三人が吾一人に返答せよとの事成ればいでく返答仕らん

五郎 色よき返事をなされ

四郎 しばらく其所にて御思案召され神通の弓に方便の鎗矢を番へ、五郎の胸先を一矢にいかけん

五郎 如何に四郎王子吾前に方便の鎗矢が参りて候が、如何なる仔細か語り候へ

四郎 それハ御不審御尤、吾家の裏の泉水に鴛鴦、鴨、水鳥が足をバ氷に閉じめられ羽をバ波にた、まれて、朝日を待つて立たうや立たんの處を一羽取らんと思ひ一矢射かけて候が、それが御身の前に行きて候か、何の仔細もましまさん。元の御座に控へ給へ

五郎 コレハ、計略事とは思へ共、元の御座に控へて候

四郎 さきほどの方便の鎬矢引き遅れて候が、此度ハ藤卷の寶劔を以て

五郎の首を大袈裟に斬らん

五郎 如何に四郎王子、先程の鎬矢こそ不審に思ひしに又もや藤卷の寶劔の投げ打とは如何なる仔細か語り給へ

四郎 それハ御不審御尤なれ共、吾家と申するハ北鬼まん國が近ければ産婆國と云ふ鬼が三度夜に三度くる程に藤卷の寶劔を以て拂ふて候が、其れが御身の前に行きて候か、何の仔細もましまさん。元の御座に直り給へ

五郎 如何に四郎王子、先程より種々様々の計略事を成し給ひしがそれも恐れる五郎でない。早々色よき返事をなし給へ

四郎 それバ色よき返事をなし給へ

五郎 早々返答なし給へ

四郎 これより北に當り鬼萬園あり。山波王といふ鬼に行き所望乞ひ給へ

五郎 吾を鬼の子と申するハ如何なる仔細か語り給へ

四郎 それバ語り聞かせん。汝は年幼少なるに背高くつむりは四方に生へ枝垂れ兩眼は日月の如し。奥齒は三重に生へ前齒は二重に生へ渡り

候へバ鬼のかざ子にあらんぞや

五郎 それバこれより母後の宮殿に立ち歸り、鬼の子か大王の子か明をを入れて參る。其時ハ云ふたと云はんの二重の言葉は使はせんぞや、

四郎王子

四郎 この四郎王子ハ云ふたの云はんの二重の言葉は使はんぞや。母後の宮に歸らずと山波王に參り所望乞給へ

五郎 それバ鎧の草摺た、み上げ只一太刀と思へ共さすが兄の事なれば吾存分にもなり難し。これより母後の宮にも一度立歸り四郎王子の事を告げばやと存候

歌 なさけなや同じ王子に生れきて 四郎王子に鬼と云はれし

歌 世の中に升にも足らぬ身を以て 行く先々ではかられぞする

歌 風吹けばなびかぬ草は無けれ共 吾が云ふ事になびく人なし

歌 吾心細谷川の丸木橋 踏みかへされて濡る、袖かな

これより今一度母後の宮に立歸り、四郎王子の言葉を告げばやと存候。百敷の大宮人か居ますなら出合へ給へ言語らん

后宮 如何に五郎ハ何として二度此所に立歸り候か。兄四人の返事ハ如何に

五郎 さん候。兄より三人の王子ハ同じ返事にて候へ共、四郎王子の返事をこそ聞き給へや嘯。これより北に當り鬼萬園あり山波王と云ふ鬼に行き所望乞へとの返事にて候

后 ア、コレハ、兄三人の返事より四郎王子の返事こそ聞いていと恥づかしき次第なり。なれ共これも兄王子等の仰せなれば是非に及ばず。

鬼萬國も程近きにましませ、山波王に參り所望乞給へや喃

五郎 あら何と仰せられ候かや。母よりも吾を鬼の子と仰せられ候か。鬼の子と申するハ、一才になれば一千人、二才になれば二千人、人を食ふと云ふけれ共、吾七才になれば共未だ人を食ふたる例なし。母後の仰せなら今日は始めて鬼の館に込め置きし三尺五寸の組板、一尺八寸の組箸、九寸五分の鉤丁取り揃へ。母後の宮殿を皿祭に致さん

后 あれ五郎、親に劔を向けるなら八萬地獄に七度落つると申すぞや

五郎 鬼に地獄はまします。七度ハ、十度落つる共抜いたる劔に恥はかかさんぞや

后 今死する此身ハ厭はね共思ひし事を語らねバ冥土の妨げとなるとやら、せつたばつたの暇を、たび給へや喃

五郎 せつたとは如何に

后 せつたとは其れ鬢の髪を斬るか斬らぬかの間の事なり

五郎 ばつたとは如何に

后 ばつたとは夫、手の裏を返へす返さぬ間の事なり

五郎 さればせつたばつたの暇を遣はす程に、思ひし事があるなれば一語り給へや喃

后 ア、五郎王子よく、聞き給へ。父母の御恩の高き事、第一父の御恩を申するなれば、物縫い針を手に持ちて富士の山を、一時に崩す共送り方なき父の恩、母の御恩を申するなれば、青き松葉をえこすえて菜種の臺を杓にして、大海の水を一時に汲み乾せ共、送り方なき母の恩なぞや。兄四人の王子等は皆九月半にて誕生したれ共、汝一人こそは十

三月にて誕生し、生れ出づれば、髪は四方に生へ枝垂れ兩眼は日月の如し。前齒は二重に生へ奥齒は三重に生へ渡り候へバ、鬼の子にあらんやと大野の原に捨てよとの事に候へ共、さすが吾胎内を苦しめ生れ出でたる者なれば、余り不憫と思ふ故、年三才に成る迄ハ、自らの膝をた、み育て上げ、炎々たる夏の夜は厚き衣を薄くして、高き屋倉に抱き上げて空吹く風を招きよせ、又寒々たる冬の夜は薄き衣を厚くして寒き事にもあはせざる。是程御恩の深き自らにどこに劔が立つ物か、つかばつて斬らば、斬れ。抜いたる劔に恥をか、すなよ五郎王子

五郎 ア、コレハ、親に劔を向けたるは許し給へ。劔を鞘に納め頭を地に付け頂くべし。これよりせりばの城へと攻寄せて戦に勝利を得たるなら母後の宮殿ハ、掛養ひに致するぞや

后 ア、コレハ、親に劔を向けたるハ、憎けれ共、掛養ひとは愛らしや。されバ、これより父の譲り物を取らすべし。第一唐土の巻物、日本の系圖、神通の弓に縞黄金の鎧、劔は大とうきめうれん大馬劔と申する也。抑も此の劔と申するハ、古天竺に於て九萬鍛冶とて鍛冶屋あり。中で名鍛冶白屋若者と云ふ鍛冶が唐炭千俵取り寄せて唐金七駄も担ぎ寄せ、三年三ヶ月も鍛へたる劔にて候。今この劔を、八月十五夜朧月に當て見れば、劔とは見へず、駒の頭にさも似たり。故に大馬劔と申する也。又此劔を、一寸抜けバ、一千人、二寸抜けバ、二千人、三寸すらりと抜く時は、如何なる敵の首にてもさらりと落つる劔と申する也。それに未だきんとうなる五行の文字の入りたる黄なる御旗一流父の讓として取らす也。他の王子にはぬき向ふ共必ず兄四人にはぬき向はず

兄四人に取らさず共汝いまし五郎に取らすべし。得て取り給へ埴安彦命

(案内申す宮ノ内仔細申さん門のこなたに)

太郎 如何に五郎は何として二度立ちかへり候ものか

五郎 此度は父の譲りの宝劔を授かりこれを證據として五つに配分なせと乞願ひに参りて候

太郎 如何に父の譲の宝劔を授かりこれを證據しょうことして配分なせと願ふ共其讓許りは相叶ひ申さん。早々立歸り給へ

五郎 如何に太郎王子御前をバ何とかかざり成され候かや

太郎 御前の様子が聞き度くバ漸くの間相待ち給へ。第三柱の神を呼び出しいで、返答致さん

五郎 早々返答なされよ

太郎歌 腹立つる此所も高天原なれば集まり給へ第三柱の神

三柱神 兄先王子様吾々を此所に呼び出し給ふは如何なる御事にて候かや

太郎 さん候。第三柱の神を此所に呼び出したるハ余の儀にあらず。先程

参りし五郎の悪人御前の様子を尋ね候が御前をバ何とか語り給ふぞや

三柱神 御前をバ四方四季とかたる早々返答なされ

四柱同音 如何に五郎王子御前をバ四方四季とかたる

五郎 四方とは如何

四柱 東西南北これ四方也

五郎 四季とは如何に

四柱 春夏秋冬これ四季也。さ候へバ國土は四つに定まったり、これ也

五郎 まだまだ、四つと云へ共、五つに定まತ್ತたる證據が御座る

四柱 其とは證據とは如何

五郎 天の五行地の五行これ即ち五つなり

四柱 天の五行とは如何

五郎 天の五行とは第一豊雲野尊とよくもりのみこと、第二國狹槌尊くはさづりのみこと、第三泥土煮尊ういぢのりみこと、第四意富斗能地尊おほとのぢのみこと、第五淑母陀琉尊、これ即ち天の五行也

四柱 地の五行とは如何

五郎 地の五行とは木祖久々能遲命きのおやくくのぢのみこと、火祖火産靈命ひのおをむすのみこと、金祖金山彦命、水祖水象波女命、土祖埴安彦命これ即ち地の五行也、さ候へバ國土は

五つに定まったり、これなり

四柱 まだ、五つと云へ共、四つに定まತ್ತたる確かな證據がござる

五郎 其證據とは如何

四柱 其證據とは春三月は青帝青龍王、夏三月は赤帝赤龍王、秋三月は白帝白龍王、冬三月は黒帝黒龍王、さ候へバ國土は四つに定まったり

これなり

五郎 まだ、四つと雖も五つに定まತ್ತたる確かな證據が御座る

四柱 その證據とは如何

五郎 その證據とは先づ人間にも五臟五神あり。先づ久々能遲命は肝の臟をすごし、火産靈命は心の臟をすごし、金山彦命は肺の臟をすごし、

水象波女命は胃の臟をすごし、埴安彦命は脾の臟をすごし、これ即ち

人間五神也、さ候へバ國土は五つに定まったり、これなり

四柱 まだ、五つと雖ども四つに定まತ್ತたる確かな證據が御座る

五郎 その證據とは如何

四柱 其證據とは春ハ花咲かし、夏は枝繁り、秋は實り、冬は枯るる事の候へバこれ四つ也。さ候へバ國土は四つに定まつたりこれなり

五郎 まだまだ四つと雖も五つに定まつたる確かな證據が御座る

四柱 その證據とは如何

五郎 其證據とは土倉あつて土公神を祀り、土あつてくどを塗り金あつて釜を据へ水あつて水を入れ、木あつて木をくべ火を燃やす事の候へバこれ五つ也。是上御一人より下萬人に至る迄大小に關らずこの事にはなる、者はなし。天地陰陽萬物一體の儀はこれなり

三柱 如何兄久々能運命この様な悪人と幾萬日間答を仕らん。真劔太刀

先にて勝負仕まつらん

太郎 如何にも、問答にてハ勝負つかず、真劔太刀先にて勝負せん

五郎 いや、問答にて勝負仕まつらん

四柱 よく、聞き給へ。其方ハ一人此方は四人只一時に打ち取る程に早々兜の緒を締めてしつかりかかれ。

五郎 何と仰せられ候か。其方ハ四人此方は一人を付けこみなされ候かや

四柱 さん候なかの事

五郎 抑もこの劔と申するハ一寸抜けバ一千人、二寸抜けバ二千人、すらりと抜けバ汎く敵の首にてもさらりと落つる劔と申する也。母後の仰せには余の王子には抜き向ふ共、必ず兄四人には抜き向はずとの事に候へ共、この度ハ是非に及ばず。兄四人に抜き向ひ所望乞ふべし。

兜の緒を締めしつかつかり給へ

太郎 扱も東方太郎の王子ハ青帝青龍王にてましませバ、絹巻千本ついに五郎王子にか、つたり

五郎 扱も五郎ハいもいもんなれバ、それに恐れる五郎でない。其時は共立つて向つたり

次郎 扱も南方次郎の王子ハ赤帝赤龍王にてましませバ、火炎を出して五郎王子を焼きはらふなり

五郎 扱も五郎ハいもいもんなれバ、それに恐れる五郎ではない。其時は水を出だして忽ち火炎を打消したり

三郎 扱も西方三郎王子ハ白帝白龍王にてましませバ、劔を抜いて五郎王子にか、つたり

五郎 扱も五郎ハいもいもんなれバ、それを恐れる五郎ではない。其時は共、共に劔を合はせたり。

四郎 扱も北方四郎の王子は黒帝黒龍王にてましませバ、水を出して五郎王子を真逆様に流したり

五郎 扱も五郎ハいもいもんなれバ、それを恐れる五郎ではない。其時は、大岩石の巖となりて上へは上へとせき上げて下へは水一滴も漏らさざりけり

(此間は互に立合勝負つかず)(猿田彦命仲裁に出る)

猿田彦 東西南北に鎮り給へ、東西南北に鎮り給へ

五人 東西南北に鎮り給へとは如何なる神にて渡らせ給ふぞや

猿田彦 父君に替り猿田彦命にて候

五人 猿田彦命とあるなれば一時は御任せ申さん

猿田彦 それ眺むれば、東より流れ出づる血の色は青き色にも流れたり。又南より流れ出づる血の色は赤き色にも流れたり。又西より流れ出づる血の色は白き色にも流れたり。又北より流れ出づる血の色は黒き色にも流れたり。又中央より流れ出づる血の色は黄なる色にも流れたり

各々七日七夜の合戦をなされ候へ共未だ勝負著かず。父君に代り猿田彦命所望分けて遣はさん。如何太郎王子は何時を領治し給ふぞや

太郎 さん候。某ハ春三月九十日を領治致して候

猿田彦 されば春三月九十日の中より末の十八日を引き抜き、これを春の土用と定め、残る七十二日を掌どり、山八萬地八萬八方千里の境には青き御幣を立て、地より上をバ甲の里、地より下をば乙の郡、甲乙木性の産子を守り、これも本座に直り給へや喃

太郎 畏つて候

猿田彦 次に次郎王子は何時を領治し給ふぞや

次郎 夏三月九十日を領治致して候

猿田彦 さればこれも夏三月九十日の中よりも末の十八日を引き抜き、夏の土用と定め、残る七十二日を掌り、山八萬地八萬八方千里の境には赤き御幣を立て、地より上をバ丙の里、地より下をバ丁の郡、丙丁火性の産子を守り、これも本座に直り給へや喃

次郎 畏つて候

猿田彦 次に三郎王子は何時を領治し給ふぞや

三郎 秋三月九十日を領治致して候

猿田彦 これも同じく秋三月九十日の中より末の十八日を引き抜き、秋の土用と定め、残る七十二日を掌り、山八萬地八萬八方千里の境には白き御幣を立て、地より上をば庚の里、地より下をバ辛の郡、庚辛金性の産子を守り、これも本座に直り給へや喃

三郎 畏つて候

猿田彦 四郎王子は何時を領治し給ふぞや

四郎 さん候。某は冬三月九十日を領治致して候

猿田彦 されば是も冬三月九十日の中より末の十八日を引き抜き、冬の土用と定め、残る七十二日を掌り、山八萬地八萬八方千里の境には黒き御幣を立て、地より上をバ壬の里、地より下をバ癸の郡、壬癸水性の産子を守り、これも本座に直り給へや喃

四郎 畏つて候

猿田彦 如何五郎王子よく聞き給へ。兄四人の王子等の領地九十日の中よりも末の十八日づつを引抜いて候。これも四つ合はせば七十二日に相成る程に、これよりも中央に立ちて中間一萬八千里を掌り、境々には黄なる御幣を立て地より上をバ戊の里、地より下をバ己の郡、戊己土性の産子を守り、これも本座に直り給へや喃。これにても不足まじませば三ヶ年に一ヶ月の月を作り出しこれを五郎に得さす。その方法としてハ先づ一ヶ年の日數三百六十五日あり。これ迄の四人の領分は三百六十日なり。その餘りの五日をバ三ヶ年つもれば十五日になり。又一ヶ月三十日を小の月として一日を一ヶ年に五日出す。是も三

年積れバ十五日になり、合はせて三十日あり。此月を閏月として五郎に得さすべし。さうすれば三ヶ年に三十七回満月があり、これで月も三十七ヶ月出来れば、毎月満月が十五六日に定まる即ち是月令なり。兄四人王子より閏月一ヶ月を増して得さする程に是にて納受なし給へや喃五郎 コレハく、御忝けなき事にて候、納受致して候

猿田彦 さればこの上ハ五人王子は心かはさぬが為一首連ね給へや喃一同歌 たき(あき) 空や野菊の花も散らば散れ王子王子の心かはさぬ

この「五郎の王子」は、私の友人で某神楽保存会の会長にお願いし、古くからの口碑(伝承)されたものを実際に唄ってもらい、私が書きとつたもので、文字などいささかなあやまりがあるかもしれない。

神楽については、日本の宗教音楽として最も代表的な芸能。古代宮廷においては、天宇受売命の子孫の猿女という巫女が、代々奉仕した鎮魂——外来魂を来触せしめる呪術——があり、天の岩戸の故事に始原している。

神話に基づく猿田彦舞・宇受売舞・八幡舞・稻荷舞・竜神舞などがあり、岩戸開き、大蛇退治など神話劇の構成もある。

舞の基準は「陰陽五行」の摂理に基づき、順逆に踏み回る足どりや、舞人の手の結ぶ印とか、採物の所作に呪術的な意義をもっている。大國主が政事をする国土を、高天原の勅使に奉獻する物語を劇風に仕組んだ「国譲り」は、老若男女すべての観客を楽しませる。

素盞鳴命が、高天原を追われて、出雲の国へ舞い降りて、悲嘆にくれて

いた翁と婆に出会い、事の委細を聞いて驚き、八俣の大蛇を退治して稲田姫を救う「大蛇退治」という神楽など……。

また、吉備津彦命が、備中国の主宰、岩山明神に依頼され、その使者内宮姫より弓矢を渡され、新山にたてこもつて邪道を働く温羅を神通力によつて退治する物語は、舞台ななめに一反の白布を配し、血吸川になぞらえ、兩岸で矢喰の合戦が、太鼓のはやし声による舞の説明など備中神楽独特の「吉備津彦」の舞もある。

荒神神楽などで演じられる、神楽の締めくくりとなる「五郎の王子」は、普通の神楽と少し調子を異にした太鼓の調べで語る口調が今でも忘れられない。

古代中国の陰陽とならんで有力な考え方で、木火土金水の五つをいう五行がある。つまり五つにまとめられる傾向があつたといえる。五つにまとめられるには理由がある。古典をみると、五典・五刑・五礼・五穀・五美・五霸・五教というように、事物を五つにまとめたものが多い。

「五」という数は人の片手の指の数で、一つのまとまりを表わす標準になる。それは戦国中期、天文の観測から五つの遊星が占星術などの仲介によつて五行に結合したことになるが、これは五行から五行説に移つていく過程をはつきり示しているといえよう。

八世紀初めに成立し、現存する我国最古の歴史文学の数多い口伝えを、天武天皇が稗田阿礼に命じて覚えさせ、元明天皇が太安麻呂に書きとめさせた「古事記」の「神々の生成」に、次に木の神、名は久久能智神を生み……次に火之夜芸速男神を生みき、亦の名を火之かが毘古神と

いい、亦の名は火迦具土神という。

この「五郎の王子」舞こそ小さいときの私の脳裏にやきついた神楽舞である。今、前述の神楽口上を読むほどに「古事記」に出てくる神話に古代中国の五行説をからませた口碑であるように思える。「古事記」や「日本書紀」の神話から作られた伝承による「神話の踊り」こそ、日本各地に神代神楽とよばれ、祭り芸能として営々と伝えられている。

夜も更けてゆくと、お参りの人数も少なくなり、神楽を見る人もだんだんと去りゆく、子どものころ父につれられ、朝方二時半ごろまで、舞台上で舞う姿に見とれ、舞人の口上に耳をすまます。たえられない想い出である。

風の鳴る夜に――。私は一人帰路につく。一昨日の朝の十時よりお盆の一時間だけ休息し、夕方五時まで……一日六時間も「五郎の王子」の口上を滑らかな舞曲で唄ってくれた友人に長い疲れを少しでもいやしてもらうべく心ばかりの酒宴をはる。

とほとほと夜路を歩くと、そこには「五郎の王子」の姿が頬を赤らめるように輝いて、消えてゆく。群像のざわめきか、葉擦れの音か、夜の中を風が渡って行く。雲は速く東へと走り、その走り去る雲の影を写し出すような光は、夜の深さばかりを教えてくれる星だけであった。

【付記】

壬癸	庚辛	戊己	丙丁	甲乙	十干
水星祖	金星祖	土星祖	火星祖	木星祖	五行
冬	秋	土用	夏	春	五時
北方	西方	中央	南方	東方	五方
四郎	三郎	五郎	次郎	太郎	王子
黒色	白色	黄色	赤色	青色	五色
弥都波能売神 (水象波女命)	金山毘古神 (金山彦命)	波邇夜須毘古神 (埴安彦命)	火之迦具土神 (迦具土命)	久久能智神 (久久延運命)	古事記の中の神々

※()内は神楽の中に出る神名。